

市民版 まちめぐりガイドバス事業の取り組み

（千歳鉱山を中心に）

三 上 禮 子

NPO法人千歳ひと・魅力まちづくりネットワーク代表理事

市民協働「まちめぐりガイドバス事業」の下見調査に出かけた今年五月、美笛地区の国道276号にはまだ雪が残っていました。

美笛トンネルを越えて、左右に大きい駐車場のある場所で車を止めました。ここはかつて千歳鉱業所総合事務所があった場所です。そのなかの当時「購買」と呼ばれた建物が大滝村「フオレスト276」ができるまで「美笛食堂」として親しまれていたといいますから「千歳鉱山」の名残です。駐車場に続いて道路幅五分半の砂利道が森のなかに伸びていました。これこそ千歳鉱山への道、地図と照らし合わせながら歩いていくとすぐに「八千代橋」が出現、舞園町、旭丘と住宅街、市の美笛支所があつて千歳会館も近くです。この国立公園内の深い森林のどこに、最盛期には五千人の人たちの生活があつたと想像するだろうか。クマが出そうな森が続いている。堅く踏み固められたジャリ道に当時の人の面影をしのばせて、その先どこまでも行きたい衝動はあるものの「永代橋」のあたりで引き返しました。

「NPO法人千歳ひと・魅力まちづくりネットワーク」は八年前に設立し、市民活動の活性化・充実に伴うよりよい人材の育成事業を行うなど、

人の魅力溢れる心豊かな「まち」への必要な支援・事業を行う等の目的をもつた団体として活動を続けています。設立のキッカケは、ちとせ生涯学習まちづくりフェスティバル・ふるさとポケットでの取り組みから「市民活動が社会的に人格のある組織として認知された団体として、市民のまちづくりに参画していきたい」というところにあります。

現在取り組んでいる事業は、A4版八ヶ『千歳市民文化情報ひろば』の毎月発行と「まちめぐりガイドバス事業」の二つが中心です。様々な市民の声を聞き、毎日の生活の中で感じる魅力ある場所、建物、自然などお気に入り情報を集めること、『市民文化情報ひろば』の紙面を飾ったスポット等を手がかりに、住んでいてなかなか気づかない千歳の魅力の発掘につなげています。の中でも千歳の歴史を知る事は、市民生活がどうあつたのかを探るなかで、どうあるべきかの示唆を与えてくれます。

行政と市民の協働事業「まちめぐりガイドバス事業」は今年三年目、市民の目で千歳の魅力を紹介しようとテーマにそつて掘り下げた事前調査を続けています。まちの知られざる魅力に迫る楽しさ、千歳の魅力再発見もまだまだ奥行きが深くおいつけません。乞うご期待です。

今年度の計画をたてるにあたって、国立公園支笏湖を一番いい季節に自分の足で歩くことで、自然環境を体感出来る内容をと検討しました。「美笛の滝」に話が進むに及んで、以前から気になっていた「千歳鉱山」もコースに加えました。図書館で資料を探しましたが思うようにならず、出会う人ごとに「千歳鉱山」について聞きまわりました。二十年前のことであり、直接関わった方も元気でおられ様々な貴重な話を聞くことが出来ました。まちが消えて「元の山林に戻ったから何もないよ」と。

にぎわいのあつた当時のまちを蘇らせたいと思いながらの資料作成でした。

千歳市街地から約五五キロ、支笏湖美笛の山奥で五〇年にわたる生活がありました。その規模といえば多い時で五〇〇〇人、そこは優良な金、銀含 有量を持つ鉱山です。昭和八年、美笛川河口から九キロ上流、鳴尾沢（モシリ ンピュイ）上流で、山師の大野直澄が金の露頭を発見、翌年中島飛行機 株式会社系列中島商事会社が買収。本格操業の為のインフラ整備としては、 道路がつくられ、軌道が敷道されました。鉱石運搬用にガソリン機関車の 活躍です。このガソリン機関車は昭和十一年から二十七年まで、運び続け ました。線路は本山駅、鳴尾駅、八千代駅そして、美笛川河口事務所へ、 河口に運び込まれた鉱石は船に積み替え、支笏湖畔に。そこから王子製紙 の軽便鉄道で苦小牧へと運ばれ、瀬戸内海・直島の精錬所へ。

鉱山労働者の生活する住宅が建てられる、子どものために学校がつくら れる、千歳村役場支所、郵便局、共同浴場、理髪所、千歳会館、魚菜市場、 診療所、法務所、配給所、山神社、クラブ等まちをかたちづくる建物があ りました。短時間で、まちがつくられていく有様が年表の中から見て取れ ます。昭和十年十月初めから雪の降るまで、道路づくりと軌道敷設が行わ れました。翌年は鳥柵舞尋常小学校千歳鉱山特別教授所設置、二学級、児 童数二八名です。翌十二年には千歳鉱山尋常小学校として独立していきます。 ちなみに鉱山中学校は昭和二十二年、千歳鉱山校として千歳鉱山小学校に 併設、同二十五年千歳鉱山中学校として独立しました。

国家財政確保のための金増産政策で千歳鉱山はその規模を増大させてい く様子が、十四年六月に四五〇戸の社宅建設、さらに二一〇〇戸の社宅建設、 人口は、三七〇〇人とその急増ぶりによく現れています。最盛期の昭和十 七年は人口五〇〇〇人程、当時の千歳村全体の約三五、ざといますから大 変なことで、千歳の国民学校が十学級五〇二人なのに対し鉱山尋常小学校 は一二学級五四八名と記されています。支笏湖の山奥に千歳の学校より大

規模な学校と生徒がいたのです。子どもが生まれた時、病気になつた時は どうしたのでしょうか。生活の基盤ともいえる人とのきずな、助け合いは どのように生まれたのでしょうか。写真を見るとお祭りの熱氣、活気、子 ども笑顔、晴れ着が多くを語ってくれるように思います。六月十一、十二、 十三日は山神社のお祭り。十月は稻荷神社祭りがありました。お祭りには 千歳神社から宮司さんがきておはらいをする。山神祭りの六月十二、十三 日と会社は休み、鉱山住民全員が参加したお祭りです。盛大なる相撲大会 の写真もありました。六月一日は支笏湖の湖水開き、初夏の陽気のなかで チップ釣り。地区運動会の真剣な選手とその応援と盛り上がった楽しい行 事が続く季節。一丸となつて催されたこうした行事こそが鉱山での生活を 潤したに違ひありません。

千歳のまちに出るとしても、ガソリン機関車に乗って支笏湖川口に、そ こから船に乗りかえて湖畔到着。そこからの交通機関は王子の山線でしょ うか、それに乗ると苦小牧に行ってしまいます。それとも王子の山線で第 四発電所に行き、そこから歩いたとでもいうのでしょうか。千歳は本当に 遠い存在だったに違いありません。このガソリン機関車はガソリンが燃料 だが対米戦局でアメリカから石油輸入がストップし、一時蒸気機関車が使 われています。戦局が激化すると、国の政策で発展してきた千歳鉱山は、 金山整備令のため保抗鉱山に指摘され保安要員四、五〇人を残すのみの山 になりました。当時は所長以下従業員八五〇人、家族を含めると三〇〇〇 人位でしたから、まちはからっぽです。施設も移転で、休山状態になりま した。施設は他に転用され、解体された資材は苦小牧に運ばれて、王子の 山線の線路付近に野積みされて終戦を迎えたとされています。戦後の再開 まで、保抗要員として残された家族は山で採れるタケノコ、フキなど山菜 を食べてしのいだと記されました。

二十三年鉱山再開、会社は三菱金属。各設備は夜昼ない突貫工事が続けれられ、二十六年、選鉱場が完成していよいよ本格操業が始まりました。ある程度美笛で選鉱出来るようになり本州直島送りの鉱石の量が大幅に減りました。二十七年、支笏湖西岸船着場に至る軌道を撤去、トラック運行としたのでガソリン機関車は姿を消しました。車は確かに便利な乗り物だが、山奥で走る機関車を思うとき自然に溶け入りそうなシルエットが脳裏に焼き付きます。

さて子どもたちに話を移すと、鉱山中学校を卒業すると、高校は寄宿舎付きの学校が苦小牧にあり、そこに進学、あるいは就職、どちらにしても苦小牧です。この寄宿舎に一階があつて、大人が鉱山から苦小牧に出てきた時一泊する。下に子どもたちがいるのだから品行方正が望ましいが、酒を飲むしか何もする事がない。子どもの目を盗んでというわけ。娯楽施設「千歳会館」はマス席五〇〇人収容で、映画、演劇、地域の芸能など計画的に活用されていました。鉱山の労使で文化委員会をつくり、映画等の催し物を決める。子どもたちと一緒に笑つたり泣いたり、ハラハラドキドキ。家路にむかう親子のつながりは一層深まつたことでしょう。昭和三十四年、西側胆振線大滝駅に通じる道路が美笛峠の難工事の末開通、同三十五年支笏湖南岸の林道がモーラップとの間に開通、この苦小牧、喜茂別線の道路は四十五年に国道となり、千歳鉱山の輸送面はかなり改善されました。バス利用が進んで美笛は陸の孤島ではなくなりました。

鳴尾沢の上流で金の露頭発見があつてから休山式までの五十三年で産出した金は約二〇トント、銀約九トントにのぼります。数々の合理化政策を乗り切ってきたが無念の鉱山操業停止。閉山式ではなく「休山式」が昭和六十二年二月二十四日、ホテル日航千歳で行われました。ここに育つて、ここをふるさとにして、まちは国有林に戻りました。

現在、休山式からおよそ二十年がたち現地は深い森の中です。森に足を踏み入れたまちめぐりガイドバス事業。二十六日土曜日、朝から高温と強い日差しの中を、千歳鉱山跡地を目指しました。

下見調査で得た手がかりを頼りに森の中のジャリ道を案内しました。踏み固められた道には長い間の生活の歴史を感じられる。地図を見て分け入ってみると、左に折れて

「千歳会館」、右に進むと山神社。美笛川に沿つて、このあたり橋を渡つて「クラブ」

でしょう。笑いあり、涙あり、忙しい子育ての時期、冬は厳しい寒さと向き合つて生活。寂しくはありませんでしたか、ご苦労が忍ばれて、そんなことが思われました。

八千代橋を渡つて左にカープしたあたりはグラウンドだった場所。その周辺にルピナスの花が咲いていました。花を見てきっと巡ってきた春を喜んだことでしょう。電信柱の小さなプレートに「美笛小学校」の文字、橋には立派な「八千代橋」の名板、休山式から二〇年で育った一帯の植生、草の生えないジャリ道、永代橋周辺の護岸コンクリートが見られました。



写真-1 まちめぐりガイドバス事業、鉱山跡地を見る

流に誘われるままに厳しい一本道を黙々と登りました。帰りはあたりの風景を見る余裕も出てきました。千歳鉱山の福神沢鉱口の近く、その名残の配管を見つけたり、コンクリートの四角な建物を見つけたりで興味のつきないコースの連続でした。美笛の滝は、福を与えてくれる弁天様、金鉱にあやかったともとれる名の「弁天の滝」とも呼ばれ、弁天の裳にも似た姿でした。

国立公園のなかでありますながら、ここに大きな町があつたこと、金ブームにわきかえった昭和初期の興奮を千歳の一つの歴史として伝えるすべはないものだろうか。ガソリン機関車が鉱石ではなく、観光客を運んで湖畔を一周するなんて夢がよぎつたりします。

昨年の「まちめぐりガイドバス事業」の支笏湖編では、千歳出身の作家・畔柳二美に焦点を当てました。苦小牧王子製紙の第一発電所で育った様子が生き生きと書かれた『山の子供』を手がかりに王子製紙の第一発電所の下見調査に行きました。王子の軽便鉄道の線路が第四発電所から湖畔に、そして苦小牧に伸びていたことを知り、当時の機関車を見に苦小牧に、黒い蒸気機関車と貴賓車が公園に展示されていました。

この黒いかたまりが煙をはいて走っている、支笏湖ブルーと豊かな自然環境、思うだけでワクワクする。思えば木材運搬の機関車。道路の開通で姿を消しても仕方ありませんが、便利さの裏側に貴重な財産と思わず捨ててきたように思うのです。同時に、支笏湖ビジターセンターでこの機関車をモチーフにした版画展が開かれていることを知り、早速出かけました。湖畔を走る黒い蒸気機関車はまるで宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』の世界です。

畔柳二美の生い立ち作品に触れるにつれて、強い気性、感受性、行動力



写真-2 苦小牧で王子製紙の軽便鉄道機関車、貴賓車と対面

などに驚いたのですが、それは発電所の技師であった父親とともに自然の懐深く分け入った生活で培ったからだろうと彼女の小説『山の子供』を読みました。時を同じくして千歳市立図書館に「畔柳二美の世界」と題して常設展示されたので「まちめぐりガイドバス事業」支笏湖編で最後の見学場所にして全員で見てきました。最近常設展示としてやはり千歳の尊敬する作家である「長見義三展」が始まりました。合わせて是非見て頂きたいたいと思います。畔柳二美文学を若い世代千歳市民にどう紹介していくのか今後の課題として考えていました。最近常設展示としてやはり千歳の尊敬する作家である「長見義三展」が始まりました。合わせて是非見て頂きたいたいと思います。畔柳二美いきたいと思っています。「千歳の縄文文化を探る」も市民にガイドしたいテーマです。キウスの周堤墓、ウサクマイ住居跡、地層に見る古代史、道路工事に先立つて行われる遺跡発掘調査などから解るのは、千歳は縄文の昔から千歳川の恵みに支えられて人の営みが続いてきた場所ということです。千歳川は豊富にサケが遡上し、獣糞採集生活を支え続けるだけなく、舟を利用して物流、人の交流を進めてきました。特にキウスの周堤墓は、約三千年前の縄文時代のお墓として、日本一の規模です。丸く堀り、その土を回りに積み上げてるので周堤墓です。当時の道具を想定して、

仮に一人が一日で一×一×一㍍の穴を掘つたとすると、二五人でおよそ四ヵ月もかかるといいます。こんな労力と時間をかけて、何の目的で作られたのか不思議です。国の指定

重要文化財「土製仮面」「動物形土製品」を見るにつけても、メノウ、黒曜石、古銭など千歳では産出しない道具を活用しているなど千歳の縄文時代が多彩で豊かであったと想像されます。



写真-3 千歳の縄文文化をめぐる、遺跡発掘調査を見学

が、調べたり資料作成したりに時間がかかり、私たちの方では、精一杯の回数です。千歳が思わずぬところで輝きを放つ度に楽しみが増えていきます。知ることから始まる我がまち千歳への愛着が、市民のまちづくりへと、その輪を広げていけるような「NPO千歳ひと・魅力まちづくりネットワーク」であります。千歳の魅力を多くの関心ある市民とともに見つけていきたいのです。誰もが千歳の市民であることに喜びがもてるよう、人の魅力がまちの活力、一日の小旅をキッカケにつくられる多くの友情の輪を広げたいと心がけています。



写真-4 全員集合！暑くてバテました